

2019.02.01 修士論文最終発表

地質・地形からみる中世荘園地の立地的特質

ー福井平野及び鯖江・武生盆地を対象としてー

中谷研究室 千年村研究ゼミ

修士2年 甲斐貴彬

目次構成

序章

0-1. はじめに

0-2. 研究目的

0-3. 研究方法

0-4. 既往研究

0-4-1. 荘園研究

0-4-2. 〈千年村〉研究

0-5. 本研究の位置づけ

本論

第一章 古代・中世の農地開発

1-1. はじめに

1-2. 条里プランの成立・定着・崩壊

1-2-1. 条里プランの成立・定着

1-2-2. 条里呼称法の崩壊

1-2-3. 条里プランの坪の機能

1-2-4. 条里プランの里の機能

1-3. 越前国における条里プラン

1-3-1. 越前国における条里地割

1-3-2. 越前国における条里呼称法

1-4. 東大寺による墾田開発

1-4-1. 土地の開発・利用に関わる微地形の分類

1-4-2. 東大寺の墾田と微地形との関係

1-4-3. 8世紀における東大寺領の状況

1-4-5.14世紀における土地利用の進展

1-4-6. 古代・中世における微細微地形克服のプロセス

1-5. 奈良・平安前期の村落形態

1-6. 小結

第二章 荘園制の変遷

2-1. はじめに

2-2. 成立期（8世紀後半～12世紀末頃まで）

2-2-1. 初期荘園（8世紀～10世紀）

2-2-2. 越前国の東大寺初期荘園

2-2-3. 摂関期の荘園（10世紀～11世紀前半）

2-2-4.10・11世紀の越前国の荘園

2-2-5. 院政期の荘園（11世紀後半～12世紀末）

2-2-6.11～12世紀の越前国の荘園

2-3. 展開期（12世紀末～14世紀中頃まで）

2-3-1. 公武両政権による荘園支配

2-3-2.13～14世紀の越前国の荘園

2-4. 動揺・解体期（14世紀後半～15世紀末頃まで）

2-4-1. 農民層の結束

2-4-2. 守護・地頭による荘園侵略

2-4-3. 請負代官制

2-4-4. 村落構造の転換と土一揆

2-4-5. 荘園制の解体

2-5. 小結

第三章 福井県の地質・地形

3-1. はじめに

3-2. 地質

3-3. 特徴的な地形

3-4. 小結

第四章 福井県における荘園地プロットの立地変遷

4-1. はじめに

4-2. プロット手法

4-3. 荘園地プロットの年代変遷

4-4. 荘園地プロットの立地パターン

4-5. 荘園地プロットと条里地割との分布比較

4-6. 小結

第五章 福井県における荘園地プロットの立地と集落構造との関係性

5-1. はじめに

5-2.A期（700～1000年）の荘園

5-2-1. 低地部：坂井郡高屋荘

5-2-2. 山麓部：今立郡方上荘

5-3.B期（1100～1300年）の荘園

5-3-1. 谷底平野：吉田郡志比荘

5-3-2. 低地部：丹生郡大蔵荘

5-4.C期（1300年以降）の荘園

5-5. 小結

第六章 考察

結論

図版出典

参考文献

序論

背景・目的

本研究は、既往の荘園に関する膨大な研究成果を元に、〈千年村〉研究によって確立された集落の持続要因を評価する手法を用いて、集落の成立当初から現在に至るまで続く人と自然との関係性を明らかにするものである。より具体的な目的は以下の2つである。

①中世の荘園制の下で、どのような地形条件が開発の対象となったのか明らかにする。

②①の開発当初の地形条件が、現在の集落に与えている影響を明らかにする。

0-3. 方法

本研究では、福井県の福井平野及び鯖江・武生盆地に分布する古代・中世の荘園を対象としたい。対象地域は古代の条里プランが広範に見られ、同時期には東大寺初期荘園が設置されるなど、古代から農地開発が盛んに行われてきた場所であり、先行研究も豊富である。また、平野の地形は丹生山地と越前中央山地などに囲まれた盆地状の地形になっており、集落の様々な地形立地が見られる。

前述の研究目的、対象地域を踏まえ、以下のような手順で研究を進める。

・古代から中世にかけての農地開発や荘園制の展開についてまとめる〈第一・二章〉

・対象地域の地質、地形の特質についてまとめる〈第三章〉

・プロット分析から地形条件の傾向を見る〈第四章〉

・現地調査を元に地形条件が現在の集落に及ぼす影響について評価する〈第五章・考察〉

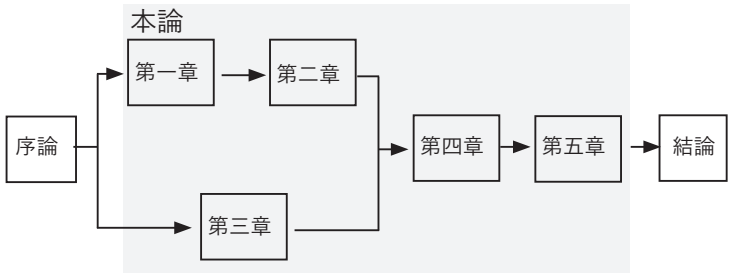


図1 本論文の構成

0-4. 既往研究

①荘園研究

・40～60年代の主な研究

①成立過程論：荘園の支配形態や経営体制を解明

②構造論：中世村落の支配・階級構造を解明

・70年代以降の研究

荘園に関する歴史的景観・環境の保存を目的とした、考古学・民俗学・歴史地理学などをも踏まえた総合的な研究

②〈千年村〉研究

平安期に編纂された『倭名類聚抄』記載の古代郷を、『角川日本地名大辞典』によって比定された現在の地名をもとに、日本地図に大字単位でプロットした。

このプロットを元に、関東地方を中心に実地調査を行い、これらの集落が1000年以上の長期に渡って持続してきた要因を環境・交通・地域経営・集落構造の4つの総合的な観点から評価する手法を確立した。

0-5. 本研究の位置づけ

本研究は既往の荘園研究及び歴史地理学研究で議論されてきた、村落と環境との関係性を元に、中世における荘園の立地的特徴が現在の集落に与える影響を、〈千年村〉研究で確立した手法によって評価するものである。

1. 本論

第一章 古代・中世の農地開発

◆古代条里プラン

条里プランは条里地割と条里呼称法という二つのシステムから構築されており、両方が定着するのは一般に平安期であった。

越前国における条里プランについては、坂井郡・足羽郡・丹生郡に条里地割の分布が見られ、その呼称法は南北・東西両基準線によって四象限に区切る特有のものであった。

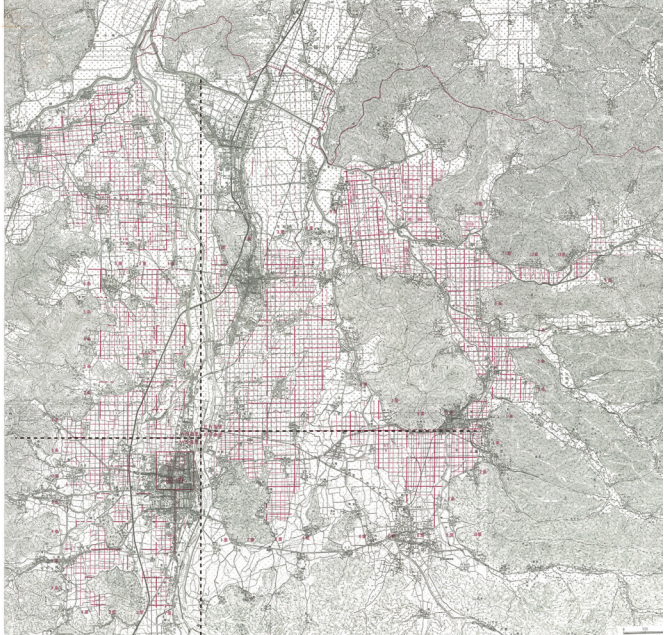


図2 丹生郡における条里地割分布

◆古代・中世の農地開発の発展

8世紀の東大寺領初期荘園

開拓については一般的に微細微地形を克服する規模であったものの、実際の耕作については荒廃地・畠の割合が多く、水田の現作率は低いという不安定な耕作状況であった。→このような状況は中世を通じて土地利用を集約化することで克服されていった。

第二章 荘園制の変遷

本章では永原慶二による荘園制の3つの時代区分を元に、その展開を簡潔にまとめた。

①成立期（8世紀後半～12世紀末頃まで）

墾田永年私財法を契機として、諸大寺による初期荘園が畿内を中心に設置されたが、その経営は不安定でやがて荒廃した。9世紀以降、公領も荒廃が進み、「富豪層」による墾田や「雑役免荘園」が新たな荘園の形態として登場した。さらに、11～12世紀には、地方の開発領主（≒武士）たちが、自身の墾田を中央権門に寄進する動きが盛んになり、院政の下で膨大な荘園が寄進され成立した。

この時期の越前国では、東大寺の初期荘園が盛んに設定されたのち、10～11世紀には摂関家を中心に免田型荘園が形成され、11世紀以降になると領域型荘園が成立した。さらに、12世紀には院や平家との結びつきが強まり、荘園の数は急増した。

②展開期（12世紀末～14世紀中頃まで）

鎌倉幕府が成立し、全国に守護・地頭制が広まっていった。地頭が各地の領家方と争うケースもあったが、全体としては武家政権と公家政権が協力して荘園制を維持する状態にあった。しかし、13世紀後半の蒙古襲来を期に幕府は荘園への支配を強化し、さらに建武の新制によって鎌倉幕府が倒れると各地の守護・地頭が荘園を侵略していく傾向が強まった。この時期の越前国では、院や在地有力武士らによる荘園支配が続いたが、承久の乱以降はその多くが没落し、代わりに地頭による支配が広まった。

③動揺・解体期（14世紀後半～15世紀末頃まで）

先に挙げたような守護・地頭（国人）の荘園侵略に加え、在地では悪党の出現や惣百姓らの団結によって、荘園制が脅かされるようになった。守護の中には国人や百姓層を支配下に入れ、独自の税制を定め、領国一円を支配していく者も現れた。このような動きによって15世紀末～16世紀はじめにかけて各地で荘園制の解体が進み、戦国大名による貫高制そして秀吉による太閤検地によって荘園制は解体された。

第三章 福井県の地質・地形

◆地質

3つの大きな地質帯：飛騨帯・飛騨外縁帯・美濃帯

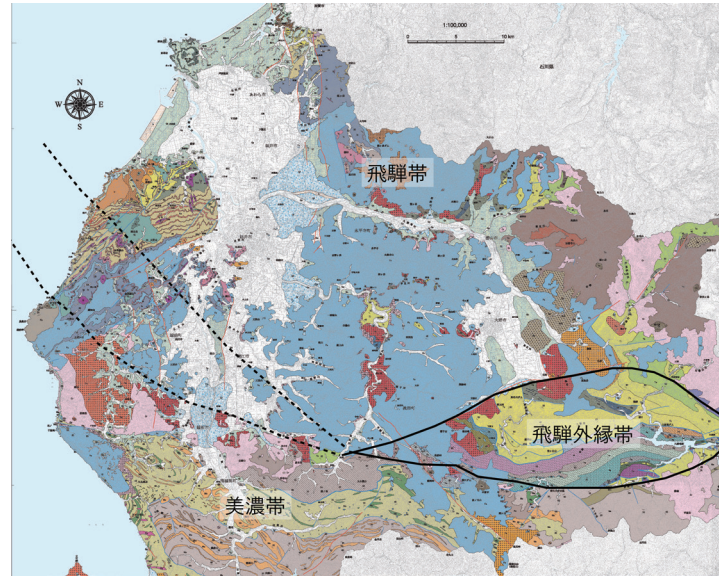


図3 福井県の地質帯

福井低地帯の形成

第四紀の中期更新世のころになると、北陸全体で隆起運動が起り、これと相対するように福井平野及び鯖江・武生盆地は沈降し現在の地形の大枠が形成された。

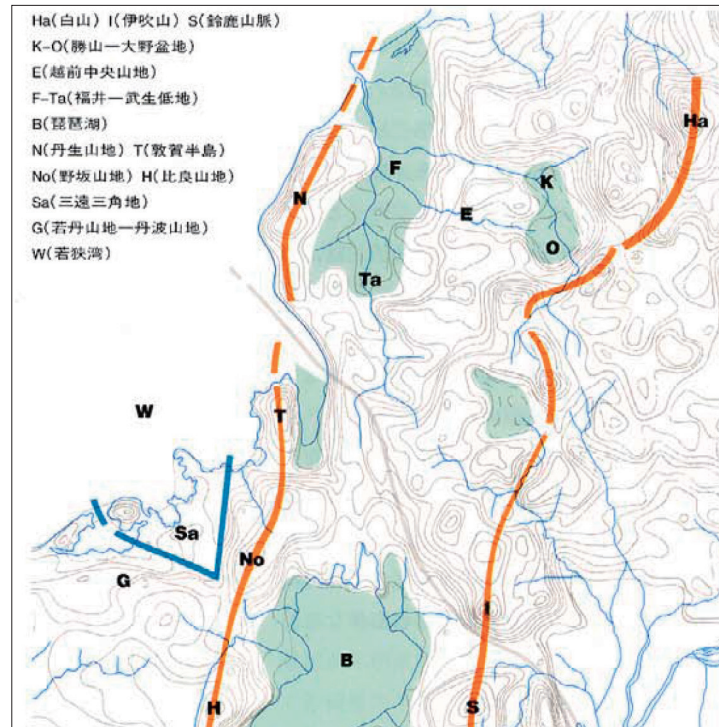


図4 福井低地帯の形成

◆地形

福井平野

山麓線が複雑に入り組む、孤立丘がそびえるなどの特徴を示す。南北方向の断層群はこれらの平野・盆地の直線的な山麓線として表れるほか、その中央にそびえる孤立丘や台地が南北方向に並んでいることにも表れている。

九頭竜河谷

九頭竜川中流域の約15kmの狭さく部を指す。東西方向の構造的運動によって形成されたと考えられている。

第四章 福井における中世荘園地プロットの立地変遷

本章では、700～1600年の間に福井平野及び鯖江・武生盆地で成立した荘園地プロットから、以下のような傾向を見出した。

①開発の順序

〈低地部（自然堤防帯）→低地部+山麓沿いの段丘または沖積錐扇状地→山地の谷底平野→低地部+段丘〉の順に開発が進んだ。

②条里地割との分布比較

A期（700～1000年）：条里地割の周縁部に分布
B期（1100～1300年）：条里地割の内部を再開発。また、条里地割の範囲外では山地の谷底平野にも進出。
C期（1300年以降）：さらに条里地割外の段丘地形まで開発が広がる。

第五章 福井県における荘園地プロットの立地と集落構造との関係性

◆A期・B期の集落

沖積低地を水田として利用し、自然堤防や段丘・崖錐扇状地といった微高地上に集落を配置するといった土地利用の使い分けがなされていた。

また、農業用水についても、例えば沢水と溜池を併用するなど、複数の水源によってまかなわれている事例もあった。

◆C期の段丘部集落

現在市街化されており、かつての集落を確認できないものの、過去の地図などから近世以前は洪水が頻発する危険地帯であり、水源も溜池のみと限られているといった、農業・居住にあまり適さない土地にあったことが分かった。

第六章 考察

第五章で見たような、C期における環境的に不利な段丘部集落への開発は、①荘園制の動揺期において百姓たちが結びつきの共同体を形成したこと、②農業技術が発展し、農業の集約化が図られたことによって、可能となったものと考えられる。

結論

福井平野及び鯖江・武生盆地の荘園地プロットについて

・〈低地部（自然堤防帯）→低地部+山麓沿いの段丘または沖積錐扇状地→山地の谷底平野→低地部+段丘〉の順に開発が進んだこと

・さらに古代の条里地割との関係から、大きくA期（700～1000年）・B期（1100～1300年）・C期（1300年以降）の3つの時代区分に分けられることを見出した。

特に、C期を境にして農地開発の大きな転換があったことを明らかにした。

坂井郡

足羽郡

丹生郡

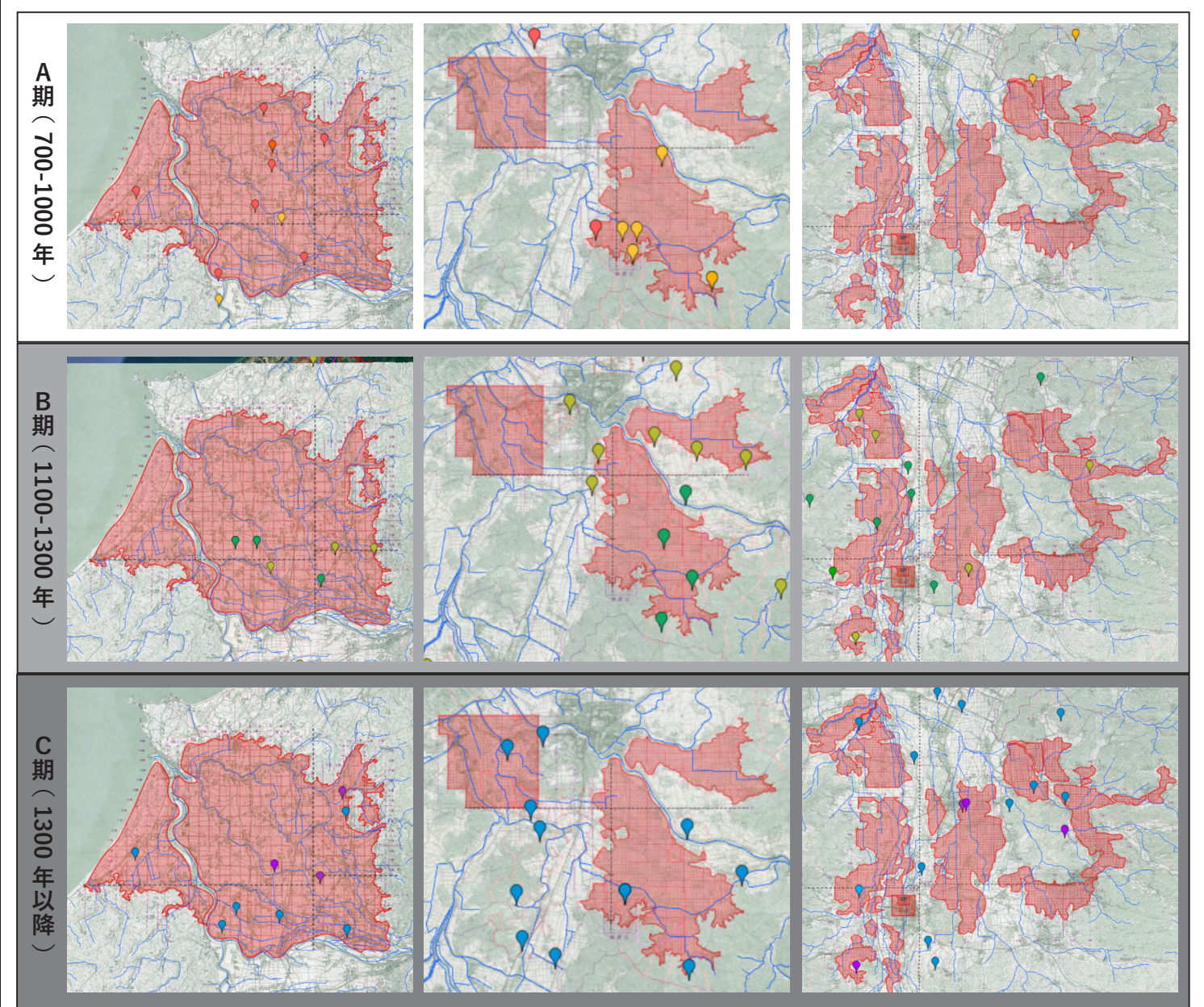


図5 郡ごとの古代条里プランと荘園地プロット分布比較

図版出典

- 図1：筆者作成
- 図2：水野時二『条里制の歴史地理学的研究』（大明堂、1971）添付地図に加筆
- 図3：福井県建設技術公社『福井県地質図』（福井県、2010）添付地図に加筆
- 図4：株式会社クボタ「URBAN KUBOTA no.31（1992.4）」p.26より
- 図5：Goole Earth 航空写真をもとに筆者作成

参考文献

- ◆荘園の制度・経営体系
 - 永原慶二『荘園』（吉川弘文館、1988）
 - 網野善彦『日本中世土地制度の研究』（塙書房、1991）
- ◆領域論
 - 福田アジオ『日本村落の民俗的構造』（弘文堂、1982）
 - 水野章二『日本中世の村落と荘園制』（校倉書房、2000）
 - 大山喬平『日本中世のムラと神々』（岩波書店、2012）
- ◆村落形態論
 - 木村礎『日本村落史』（弘文堂、1978）
- ◆農業技術史・開発史
 - 古島敏雄『日本農業技術史上・下』（時潮社、1947.49）
 - 古島敏雄『土地に刻まれた歴史』（岩波書店、1967）

- 水野時二『条里制の歴史地理学的研究』（大明堂、1971）
- 金田章裕『条里と村落の歴史地理学研究』（大明堂、1985）
- 金田章裕『微地形と中世村落』（吉川弘文館、1993）
- 木村茂光『日本農業史』（吉川弘文館、2010）
- ◆景観論
 - 石井進『中世の村を歩く』（朝日選書、2000）
 - 海老澤表『荘園公領制と中世村落』（校倉書房、2000）
 - 原田信男『中世村落の景観と生活－関東平野東部を中心として－』（思文閣出版、2000）
 - 水野章二『中世の人と自然の関係史』（吉川弘文館、2009）
- ◆福井県の水系・地質・地形
 - 科学技術庁資源調査所『九頭竜川流域の水害地形と土地利用』（科学技術庁資源調査所、1968）
 - 福井県建設技術公社『福井県地質図』（福井県、2010）
- ◆福井県の地域史
 - 福井県『福井県史』（福井県、1993）